2021年2月21日　久宝教会　受難節第1主日礼拝

メッセージ「神は試練を与えません」　　牛田匡牧師

聖書　マタイによる福音書　4章1－11節

先日の水曜日から今年も受難節、レントになりました。イエス・キリストが十字架に架けられるまでの受難を覚える期間として、西欧などでは伝統的に贅沢を控え、お肉を食べないようにするなどの習慣があるそうです。しかし、ふと考えてみますと、現代の私たちは既に受難の時代を生きているのではないでしょうか。新型コロナウイルスの感染が確認され、次第に拡がって来て1年を迎えようとしています。大阪府に2回目の緊急事態宣言が出されている現在は、様々な活動の自粛などにより、報告されているコロナの感染者数は一時期よりも減少して来ていますが、それでもこの一年間の間に、倒産する企業は増え続け、飲食やアパレルのお店は閉店が続いています。ほとんどの業種で給与は減り、リストラが行われ、失業する人が増えています。

そんな中、先週の土曜日には再び、福島県沖で震度6強の大きな地震がありました。私たちの教会がクリスマス献金をお送りしている「神戸国際支援機構」の方々は、翌日14日にすぐに現地入りされたそうです。その方々が聞かれた話では、地震発生後、10年前の東日本大震災の時のように、また津波が来るのではないかと思って、大急ぎで避難した人たちも沢山いらしたのだそうです。また今もなお放射能を日々、放出し続けている福島第一原発ですが、再び大きな地震や津波によって、原子炉が破損したり、大量の汚染水や汚染土が流出したら、その放射能汚染は日本だけではなく、広く世界に拡散してしまっていたことを思うと、背筋が寒くなります。福島の問題は10年経った今も、何も解決していないにもかかわらず、「復興五輪」などという掛け声で人々の目をそらせようとするのは、欺瞞でしかありません。

大きな事故や災害、病気を経験した時、私たちはこれまで当たり前と思っていた日常が、決して当たり前ではなかったということに気付かされます。それと同時に、「この苦難は何か意味のある試練なのかもしれない」と考えることもあります。「人は試練、苦難を通して鍛えられて強くなる」という考え方は、世界中どこにでも見られる考え方だと思いますが、もちろん聖書の中にも見られます。しかし、本当にそのような考え方が、全てなのでしょうか。どんな苦難をも、自分を鍛えるための試練として受け止めければならないのでしょうか。どうでしょうか。

今回の聖書のお話は、イエス様が荒れ野で悪魔から、「試み」「試練」を受けるというお話でした。以前の新共同訳では「誘惑を受ける」という小見

出しが付けられていましたが、新しい聖書協会共同訳では「試みを受ける」に変わっています。日本語では「試み」や「試練」という言葉と、「誘惑」という言葉は、随分と印象が異なるように感じますが、聖書が書かれているギリシア語では「試練」と「誘惑」は同じ言葉です。そのために、例えば「主の祈り」でも「我らを試みに遭わせず」と言われたり、「私たちを誘惑におちいらせず」と言われたりしています。

イエス様は死海の近く、ユダヤの荒れ野で洗礼者ヨハネによって洗礼を受け、ヨルダン川の泥水の中をくぐられました。そして、その後、悪魔から試みを受けるため、霊に導かれて荒れ野に行かれた、とあります。「悪魔」と言っても、全身が黒くて、角としっぽと羽根が生えているような存在ではありません。ヘブライ語で「サタン」と呼ばれる「悪魔」を表すギリシア語「ディアボロス」の元々の意味は、「間に投げる者」です。3 節では「試みる者」とも言い換えられていますが、人を惑わし誘惑する者、これが正しいという確信の間に、疑う心を投げ入れる者、人と人とのつながりを分断する者、それが悪魔であり、「試みる者」「惑わす者」です。

イエス様は、四十日四十夜の断食の後、空腹を覚えられた、とありますが、これはもちろん事実というよりは、人々の口伝えで語り継がれて来た神話的な表現なのでしょう。長い断食期間を経て、空腹なイエス様に悪魔が近づいてきて、「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」とささやきました。それに対してイエス様は、ヘブライ語聖書の言葉を引用して「人はパンだけで生きる者ではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」と答え、悪魔の提案を斥けました。「人はパンのみにて生きるにあらず」というこの言葉は有名なので、教会の外でも聞かれたことがあるかもしれません。しかし、では「神の言葉によって生きる」とは何でしょうか。もしかすると、「聖書を読むことが私たちのエネルギーの源です」と誤解するかもしれませんが、そういうわけではありません。この言葉が引用されている申命記の前後には次のように記されています。

> [2] あなたの神、主がこの四十年の間、荒れ野であなたを導いた、すべての道のりを思い起こしなさい。[3]（主はあなたに）マナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きるということを、あなたに知らせるためであった。
> [4] この四十年の間あなたの着ていた服は擦り切れず、足は腫れなかった。

古代イスラエル民族は、エジプトでの奴隷生活から解放された後、40 年もの長い間、荒れ野をさまよいましたが、その間「水がない」「パンがない」と不平ばかりを述べる民に対して、神は天からのパンであるマナをふらせて民を養いました。さらに 40 年間、着ていた服は擦り切れず、足も腫れなかったというのは、必要な物が必要な時に必要なだけ備えられ与えられた

ということなのでしょう。ヘブライ語では口や目など、体の一部部分で体全体、その人の存在全体を代表して表現します。また「言葉」はそのまま「出来事」を表す語でもあります。そのため「神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」とは、言い換えるならば「人は神から与えられる全ての出来事によって生かされている」ということです。

「人はパンのみにて生きるにあらず」、飢えている人にパンを差し出すことは、絶対に大切なことです。やなせたかしさんのアンパンマンの精神です。ですが、人が生きるとはそれだけではない。そのパンによって人が人を支配するようなことになってはいけない。パンだけではなく、太陽も雨も風も、食べ物も着る物も、住む所も、家族も、友人も、全ては神様から頂いているもの、それらの恵みによって初めて人間は生かされているということを忘れるな。イエス様はそう言って、悪魔の誘惑を斥けられました。

次に、悪魔はイエス様を荒れ野から聖なる都エルサレムの神殿の屋根の上に連れて行きます。このようなお話の場面転換も、如何にも神話、昔話のような表現です。悪魔は言います。「神の子なら、飛び降りたらどうだ」。そして詩編の言葉を引用します。ここで悪魔が引用している詩編 91 編は、いつでもどのような時でも神様が守ってくださるという内容の歌ですが、それに対してイエス様も「あなたの神である主を試してはならない」と言って断りました。神殿の屋根から飛び降りたら、無傷でいることはできないでしょう。普通の人にはできなくても、神の子にはできる。奇跡を起こして見ろ、そうすれば神の子だと信じてやろう。そのような話は、イエス様から 2000 年を経た今日でもなお、無数にあるのではないでしょうか。そのような奇跡をウリにした宗教も商売も少なくないように思います。しかし、イエス様は断りました。「奇跡が起きるか起きないか、それが大事なことではない」……。

最後に悪魔は、イエス様を高い山の上に連れて行きました。そして目に見える全ての国々とその繁栄を見せて言いました。「これを全部与えよう。ただし私を拝むなら」。日本語訳では「もし、ひれ伏して私を拝むなら」が先になっていますが、原文でも英語でも「これを全部与えよう」が先です。お腹を空かせた人の前に食事を並べて、「全部、食べていいよ。ただし私の言うことを聞くならね」と言うような、何とも厭らしいものの言い方です。きらびやかな栄華、繁栄を見せて、「欲しいですか、欲しくないですか」と迫って来ます。しかし、イエス様はその悪魔の誘惑も斥けられました。

「悪魔」、「試みる者」、「誘惑する者」、「間に投げ込む者」は、私たちの身近にいます。私たち自身の中にもいるかと思いますし、私たちもまた時として誰かを惑わし、試みる存在になってしまっていることもあるのではないでしょうか。「あなたにはこれができるはずだ」「こんなこともできない

のか」……、右と左を分け、良し悪しの評価を付け、人や自分を断罪します。しかし、それは決して神様の業、働きではありません。今回の招きの詞は、試練についての「ヤコブの手紙」の言葉でした。日本語では「誘惑」と訳されていますが、「試練」と訳して読む方が相応しいように思います。

> [13]試練に遭うとき、誰も、「神から試練を与えられている」と言ってはなりません。神は、悪の試みを受けるような方ではなく、ご自分でも人を試みたりなさらないからです。[14]人はそれぞれ、自分の欲望に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。

私たちは思いがけない所で、事故に遭ったり、病気になったり、災害に遭ったりします。そんな苦難や困難を、神様から与えられた試練、成長の機会だと受け止めて、前向きに取り組める人もいます。しかし、全ての人がそのように受け止められるわけではありません。「どうしてこんなことが起こったのか」と、いつまでも答えを探し続けておられる方々がいます。被災した人、病気になった人、事故や犯罪に遭った人……。そのような人たちに対して、「これは神様が与えて下さった試練なんですよ」と、一体誰が言えるでしょうか。「試練に遭った時、誰も『神から試練を与えられている』と言ってはなりません。神は人に試練を与えません」……。むしろ、それは自分自身が、周りの人たちよりも優れた者になりたいという自身の欲望に引かれ、誘惑されて「これは試練です」と言うのではないでしょうか。

困難に直面した時に、「こんな試練は受け止められない」と言って、自分を卑下する必要はありません。試練と困難は違います。この世界は今も昔も困難なことだらけです。私たちの身近な所でもそうだろうと思います。そして聖書に記されているのは、様々な困難に見舞われている人々に対して、「大丈夫。私がいつでも一緒にいる。あなたを守り、あなたを決して見捨てない」と語り掛け続ける命の神の言葉であり、また困難の只中にある人たちと共に歩まれたイエス様の言葉と振る舞いでした。

神は試練を与えません。だからこそ、私たちは目の前の困難について、これは試練かどうかを悩む必要はありません。その悩みはそれこそ悪魔のささやきなのではないかと思います。命の神の恵みは、全ての人に注がれています。長引くコロナ禍、経済不況の下、人と人とが裁き合い、疑心暗鬼になり、「今さえ良ければ、金さえあれば、自分さえ良ければ」という考え方が幅を利かせるようになりつつあります。そんな中、私たちは「この試練を一致団結して乗り越えよう」という弱者切り捨てにつながりかねない掛け声ではなく、いつも共にいて下さる神様に、手を引かれ、背中を押されながら、隣りの人たちとゆるやかにつながりつつ、共に困難を担い合う道へと、歩みを進めて行きます。